

## ウィングス小説大賞三次通過

『天使になる日』

原稿用紙換算108枚

犬頭8 著

ベッドの上の小さな体には幾本もの管が突き刺さり、シーツの白に幾本もの軌跡を描いていた。

青ざめやつれた顔の半分を覆う酸素マスク。その枕元で機械は鳴り響き、白衣の人間達はケンカのように激しく言い合いながら必死でそれぞれの仕事をこなす。母親は涙を堪えながら彼の名を呼んでいた。

明け方の集中治療室。

少年の命の火は、まさに燃え尽きようとしていた。

その病室の片隅に、あまりこの場にそぐわない男が立っているのに、誰も気がつかないのだろうか？

ダークスーツを着込んだ20代の半ば頃と思しき青年。背の高い細身の体型に、少々険しい顔立ちはこの緊迫した状況故、というより目鼻立ちがはっきりしている元々の顔立ちによる所が大きいようだ。きつちりとした身なりは、まるで気の早い葬儀屋が押しかけて来たようで、家族とは思えない難い。

慌しく動き回る医師や看護婦達の少し後ろで、彼だけが作り物のようにじっと動かずにいる。

その男を誰も見咎めようとしな。

それぞれが必死で彼の事など目に入っていないのだろうか？ いや、違うのだ。その姿は今ここにいて誰の目にも写らない。

…… たったひとりを除いては。

青年が動いた。腕時計で時間を確認し、すつと前に進み出る。医師達が道を開けた。だが彼の姿を捉えた訳ではない。無意識の行動だ。

青年は枕元に立つ。母親が叫び続けている。少年は既に自力で呼吸をしていなかった。ましてその瞼が開く事などありえないように見えた。

すつ、と青年の手が少年の額に触れた。  
騒がしく鳴り続けていた機械音が、甲高い単音に変わった。

母親の悲鳴。

肩を落す医師と看護婦達。

青年は言った。

「そろそろ行くうか」

その手はいつの間にか一回りも二回りも小さな手を握っていた。

枕元にはもう一人少年が立っていた。健康そうにふつくらとしている以外、ベッドの上の少年と全く同じ姿の…さつきまでは確かに『彼』だった少年。

少年は一度だけ振り向き、自分と母とを見て、それから青年を見上げ小さくうなずいた。

ふたりは喧騒の余韻を残す病室を後にした。

「あー、ヤダね。ガキ相手の仕事は」

俺は酔ったフリをする。ビール缶半分で酔う筈ないんだけどね。そんな事は充分わかってて吉野はハイハイって笑ってくれる。ま、怒ってても笑ってるみたいな顔なんだけど、こいつの場合。

職業柄吉野は、大柄じゃあないけど、筋肉がついていかにも鍛えてるっぽいから、顔が怖いとシヤレにならない。こいつが女なら「深情け」っぽい顔、とでも言ううんだろうか。丸顔で愛嬌のある顔立ちは神様と遺伝子が気を利かせたんだろう。

「三途の川渡ってる間じゅうびーびー泣きやがって『帰りたいだ』の『ママと一緒にいたい』だのって…ママだよママ！お前はどこの国の人間だっ…の。日本人なら『オヤジ、オフクロ』でしょあ？」

見慣れたこいつの部屋は、時に自分の家よりも落ちついたりする。小学校の時に買ってもらったんだらう勉強机とか、色褪せた観光地のペナントとか、足にたくさん傷のついた木製のベッドとか、町内の草野球チームで使っているバットとグローブが部屋の隅っこに投げたあたりとか、何年貼りっぱなしなんだかわからない水着のアイドルのポス

ターとか、無頓着なだけに見えて、実は非常に高度なコー  
ディネートをされてるんじゃないかと時々思ったりもする。  
多分気のせいだけだ。

「ハイハイ。あ、この酢だこも食ってよ。結構イイ味して  
るから」

そう言いながら、吉野は自分も一切れ摘む。俺も一口。う  
ん、イケる。

『北の屋』さんが置いてったのよ。この前オヤジがちょっ  
と世話したらしくってさ。五月くん好きだったっしょ?」

『北の屋』ってのは近所の居酒屋だ。高級なモンがあるわ  
けじゃないが、「ちょっぴり手間をかけた家庭の味」ってヤ  
ツで俺も気に入ってる。…偶然みたいな言い方するけど、  
わざわざ作ってもらって来たんだろう、こいつは。イイ奴  
で泣けてくる。涙の代わりにビールをあおる。

「…たく…やっつてられねーよ…」

俺は壁にもたれた。

「何よ?もう出来上がったの?わざわざ酒屋に来てさあ、  
缶ビール一本で、それはバカにしてんじゃないの?」

そう言つと吉野はさっさと次の缶を開けて、俺に渡しちま  
う。

「飲んで飲んで。アルコールなら売るほどあるんだからさ  
」ばあか。酒屋が酒売らねえでどーすんだ」

俺は口の端で笑って、手渡された缶をあおる。

とりあえずちよっとは威勢良くなった俺に吉野はニヤリと  
笑う。

「秘蔵の出して来ようか?」

「今はこれでいい」

俺は缶を上げる。

「…後でな」

俺もニヤリと返す。そう来なくちゃと、吉野は自分の缶を  
開けた。

「あー……ユキちゃんには連絡した?」

「ん?したけど?」

「んならいいや、飲も飲も」

「なんだよ。お前ユキの事好きなの?やだよ、俺お前を『お  
義兄さん』とか呼ぶの」

「違つよ!けど起きて待ってたら可哀相じゃん」

「アイツはそんなタマじゃねえよ」

俺は薄く笑って、また一口飲んだ。

下の店じゃあ吉野のオヤジがまだ帳簿とにらめっこして  
るんだろうに、若い男が二人で酒盛りなんてバチ当りにも  
程があると思っけれど、飲酒くらいであたるバチなら俺は  
とっくに百発は当ってる。他人の命は俺の収入。

俺の仕事は「死神」だ。……ま、副業だけだ。

言っとくが、俺は人間だ。極普通の両親から生まれて、  
極普通に学校を出て、極普通の会社勤めもやってる。「死  
神」ってのはあくまで副業なんだけど……まあ、その副業  
での俺の職種兼役職の通称だとも思っただけだ。通称が  
あまりにも浸透しちゃって、今では誰も正式な名称を知ら  
ないって話だが。

死神がどんな仕事かっていうと、まあイメージ通りって  
いうか、体を離れた魂（って言うより俺には命そのものっ  
て感じがする）をあの世の入り口まで運んで行く役目。お  
伽喃なんかとちよつと違うのは、俺に生かす殺すの決定権  
は無いって事。死ぬ間際「いかにも迷いそう」とか「いか  
にも地縛りそう」な感じの魂があると、俺達「死神」に指  
令が来て、しつかり成仏できるよう引率する。名前に比べ  
て地味な業務なのよ。

しかもその移動手段がびゅーんと空飛んで……とかじゃな  
く、各区に1ヶ所程度の割合で配置された「あの世の入り  
口」までフツーに電車とか徒歩とかバスとかで、行かなきゃ  
いけないのだ。……あ、そうそう。仕事中の俺って言うのは、  
他の人間からは姿が見えないらしい。人間の魂を媒介にし  
て、可視のチャンネルを踏み越えちまうから……って最初の  
頃『天使』に説明されたから「それは民放と国营放送くら  
い違うのか？」って聞いたたら「地上波と衛星放送くらい違  
う」と言われた。

今じゃあ一人でも出来る仕事だが、最初はさつき言った  
『天使』って連中の力を借りて、もともとあまり見えるも  
のじゃない魂を見たり、更に話したり触ったり出来るよう  
に訓練される。

そうすると、自分の方が魂のレベルに合っちゃって、逆に他の人間からは見えなかったり声が聞こえなかったり触れなかったりする存在になるらしい。

深く考えたと怖いので、あんまり考えた事は無い。実は一人で心霊番組を見られない人間なのだ、俺は。

で、「あの世の入り口」まで連れて行く間中魂だつて大人しくはしていてくれないわけで、隙あらば逃げ出す…つてのは案外少ないんだけど、泣くのもいるし怒るのもいるし心配するのもあるし…ちょっととした人生相談窓口だよホント。

今回だつてそう。始発の電車で、ガキとふたり並んで座つて、結局徹夜仕事になつちまつたからちよつと寝ようかなーなんて思つたら、丁度うとうとしかけた所でぐずり始めるから、俺も相当機嫌悪かつたんだと思う。鼻吸りながらガキがほざいた一言でぶち切れた。

『ママは、僕を生んで楽しい事あつたのかな…』

資料によるとそのガキは生まれつきの心臓疾患で、赤ん坊の頃から入院を繰り返して、医者にも成人するのは無理だろつて言われていたらしい。

それでも手を尽くしたいのが親ゴコロつてもんだ。心もそうだが、アイツの両親は、金も尽くした。

『僕、ママの笑つた顔見た事無い』

大欠伸中だつた俺の口が見事に「お」の形で固まつた。

『僕、どうして元気になつてあげられなかつたのかな…』

『うるせえっ！』

俺はガキを怒鳴りつけてた。俺だつて作れるくらいの歳のガキをだ。大人気無い、と思いつつ言い出した言葉は引つ込められない。

『ガキのくせに、死んでまで他人の心配なんかしてるんじゃないねえよ！んなヒマがあつたら自分があの世で閻魔様に舌抜かれねえようにお祈りでもしてろっ！』

ひくつ、つて変な声出して、その後火がついたみたいに泣き出したガキをほつといて、俺は目をつぶつた。もちろんガキの甲高い声で大泣きされて眠れる程俺の神経は太くない。

自己嫌悪。

でも、いいんだ。こんなちっぽけな自己嫌悪にすり替えられるなら。

こいつが死ぬ事がわかっていて、俺には何も出来なかったのか？

助ける方法は無かったのか？

でもそんな後悔に辿りつく前に、俺は覚めてしまう。

仕事だからな、って。

また本業よりずっと実入りがいいんだ、これが。

「おい！カズ！」

階下から聞こえてきた声に、俺は我に帰った。吉野のオヤジさんだ。

「あー？何ー？」

吉野が部屋から顔だけ出して返事をする。

「お客さんだ」

あいよ、と面倒臭そうに立ち上がると、「ちょっと待ってて」と言っ、部屋を出て行った。

それから1分も経ったか経たないか。吉野は駆け足で部屋に戻って来た。

そして慌てた様子で部屋の隅にかけてあったジャンパーを羽織る。

「悪い。ちょっと行ってくるわ。後藤んちのばーさん…アシだつてよ」

吉野は何故か照れた様に目を細める。

「いやあでも良かったわ。長患いしないで。家族にも迷惑かけないで、本人だつて苦しい思いしなくてすんだらうつよ。

…いやあ最期まで出来たばーちゃんだわ」  
意図的にだろう、明るい声でそう言う。

「じゃ、多分長くかかんねーから。ひとりでやっててよ」  
わかった、と缶を上げると、振り向いた吉野は、ちよつと笑って部屋を出て行った。

俺はひとりになった部屋で、溜息をつく。吉野は『本物の死神だ。…俺はそう呼んでる。』

俺はビールの缶を持ったまま窓辺へ寄った。カーテンをはぐると、ちよつと吉野が玄関を飛び出し、外で待っていた「天使」と落合う所だった。死神には一人「天使」と呼ばれるサポートが付く。

吉野は窓から漏れる明かりに気がついたのか、俺を見て

一度手を振って、そのまま小走りに道を渡って行った。

「吉野は、『本物』だからな。」

口に出すとなんだか虚しくなつて、思わずビールをあおる。さつきより苦くなつた気がした。

俺はそのまま窓辺にもたれる。

俺に死神の仕事を紹介してくれたのは吉野だ。高校の後輩だったが、この仕事では先輩だ。もちろんそんなんで先輩風吹かせたりする奴じゃないが。

吉野も死神一本で食っているわけじゃない……というか、いずれこの店の2代目になる男だ。長男だからというより、幸運な事に、酒屋に生まれたカズくんは俺から見ても「酒屋のおやし」になる才能に恵まれてるし、本人もそれを望んでいる。今では仕入れの半分は吉野に任されている状態だ。それでも、父親が長年やってきた日本酒の買い付けには手を出させてもらえないらしく、それが不満で且つ目標であると良く言う。

吉野は近い将来「本物」の酒屋になる。

そして……きつと死神も続けて行くんだろう。

俺は少しだけ残っていたビールを飲み干す。

吉野は死神という仕事に誇りを持つてる。…誇りっていうと偉そうで安っぽいけど、あいつは死神として、自分が世話になつた人を自分の手で送っていける事をラッキーだと思つている。「最期の最後に『ありがと』って言えるのは俺なんだぜ？」そう言つた吉野が少し得意気だつたのを覚えてる。

俺には出来ないよ、吉野。

もちろん、吉野には感謝している。生まれつき他人の死期が分かるっていうやかいな体質を「適性」と言つてくれたのは吉野だった。「五月くん向いてるよ、絶対！」といわれた時には正直嬉しかった。今まで親戚づきあいのネットワークにしかならなかつた自分の特技が金になるんだと思つたら、少しばかり見返したような気になれた。

けれど「適性」があつたつて「本物」になれるかどうかは…別だ。それに気づいたのは、結構最近だつたかも知れない。

この場合なりたいかどうか問題つて言うつか…。

俺は窓を離れると、空になつた缶を置き、本目に手をか

ける。なんだかんだでピッチが早い。

ちよっとペースを落す為、俺はタバコに火をつけた。

ついでに、ヤな仕事に当る度にこーして飲ませてもらってるってのも、感謝。俺は心で頭を下げ、プルトップを開けた。

そんなこんなで吉野が戻ってきて、2次会が始まって…俺が家に帰り着いたのは、2時だったか3時だったか…。

ふああ、と俺は欠伸をもらす。思い出すだけ眠くなる。

ガス台の上では味噌汁が吹き上がった所だった。俺はガスを止める。ご飯も炊けたし、アジも美味そうに焼けた…俺は昨日の酒が残ってて食う気にならないけど。

俺はキッチンから居間を抜けヤツの部屋へと向かう。

「起きてんのか？ユキ」

小さめにノックを試してみるが返事は無い。どうせ鍵なんざかかってないし、勝手に部屋に入るとユキは掛け布団から体半分はみだして熟睡中だった。そう寒くも無いがこういう所が俺は几帳面なわけで、思わず布団を肩まで掛け直しポンポンと叩いたりしまう。ふたつも年上の男に向かって何をやっているんだと思うが。

あまり男らしくない顔のラインや、顔の横で握っている手や、ぼけっと開いている唇は、とてもそうとは見えないが、ユキは俺の兄貴だ。

男兄弟のふたり暮し。朝食と休みの日の食事は俺が担当だ。それは、こいつがとつても寝汚いから。それなら大概「朝飯は食わない」というイメージがあるもんだが、こいつの場合は何があっても、食う。だから作らなければならぬ。

ユキが窓に背を向けて寝ているのを確認し俺はカーテンを開けてしまふ。

レースのカーテン越しの柔らかい光を浴びたユキの横顔は少し疲れているようだった。

デスクの上のヤツのパソコンに視線を移す。その脇には資料が乱雑に積み重ねられ、ツルを開いたまま置かれた眼鏡のレンズが、白い天板に透明な影を落としていた。

ユキはデザイン系の専門学校でCGデザインを専攻して

いる。昨日も課題制作で遅くまで起きていたのだろつ。

俺はユキの耳元に顔を近づけ、けれど起こさないように囁いた。

「メシ出来てつからな。起きたら食べよ」

それから俺は部屋を出て、もう一度キッチンに足を踏み入れた。その時だった。

「んー。やっぱり味噌汁は赤出汁に限るわな」

この部屋の住人ではない人間が、新聞を広げつつ悠々と味噌汁の椀を傾けている。

「て、てめ俊介っ二」

にんまりと俺を見て笑うのは、俊介。俺の「天使」だ………とか言うたちとと気色悪いな。

「天使」って言うのも「死神」同様の通称だ。

「天使のような」とか「エンジェルちゃん」とかそういうのじゃない。読んで字のまま「天の使い」だから「天使」。大体こいつの性格と来たら立派な悪魔だし。

「勝手に飲むな。勝手に読むな」

俺は俊介の手から新聞を取り上げる。

「載つとるやん。昨日さあくん連れてきた子」

見た目からして多分高校生くらい。ちょっと前から俺担当の天使になった。前も同じ位の歳の男の子だったけれど、家にまで押しかけてくるようになったのはこいつに代わってからだ。

最近の高校生にしては珍しく、髪は黒いわ真つ直ぐだわ、ピアス穴は1個も空いてないわ、顔色は普通に肌色してるわ。顔立ち自体もどことなく純朴そうで、表に出せばおばちゃん達から褒められそうな模範生なのにつ……!

一皮めくれば物事総てがソロバン勘定の利益第一主義。他人の性格だからとやかくは言いたくないが、そういう性格で関西弁（しかもエセっぽい）っていうのは出来過ぎだからどうにかしてくれ、と常々思う。

「お前な、勝手に入ってくんな朝っぱらから。ユキはお前の事知らないんだから」

もちろん、俺が死神やってるっていうのも知らない。

だが、俊介は俺の言ってる事なんて全然聞いていない。

「俺も鼻が高いで。何てったって脳死による心臓移植第1号の魂やからな」

俺はあきらめの溜息をつき、新聞に目を落した。

こういった場合のお約束なのか名前は伏せられているが、確かに新聞には「脳死による最初の心臓移植を受けた少年が…」となっている。

天使の間にどんな価値基準があるんだかは知らないが、初めて会って以来、俊介は有名人の魂を連れて行くと嬉しがる。最初は単なるミーハーかとも思っただが、そこには何やら外部（俺も「中」の人間だと思っただが）には分からない「成績」らしき物が絡んでくるらしい。

組織なんていずこも同じ…とは思えども、どう見ても未成年が人の行き死にで競い合っているのを垣間見るのとはなとも落ちつかない。

「これでまた次、エエ仕事任してもらえそうやんな」

俺は溜息混じりに前髪を掻き上げた。

「ユキが起きてくると面倒だから…用があるんならさっさと見え」

睨みつけると、ワザとらしく悲しげな顔をする。

「つれないなあ。働きモンの死神に労いの言葉を掛けに来て何が悪いん。そうそう、ギヤラは今日の午前中には振り込むって。……しかしなんやのん？あのプー兄貴まだ寝てるんか。ホンマ働かへんのやったらメシくらい作れつてなあ」

「課題で昨夜遅かったんだよ。それにプーじゃない。学生だ」

「弟は就職しとんのかい」

俺は俊介の額を弾いた。

「適材適所ってんだよ。何回言わせる」

「せやかて俺の方がええ奥さんになると思わへん？」

「奥さんは女の子から選びます」

つれなく言っておいて、俺は背を向ける。そろそろ出社の準備をしなければ。

「ユキが起きる前に帰れよ」

「あ、俺も一緒出るわあ」

パタパタと背中から足音が追ってきた。

俊介から取り返した新聞を居間のローテーブルに置くと、イヤでも見出しが目に入る。

『脳死移植の少年が死亡』  
ガキの言葉が蘇る。

『ママは、僕を生んで楽しい事あったのかな…』

これから楽しい事、嬉しい事をたくさん作るために、今の苦労と金を惜しまなかったのだとしたら、

「無駄金じゃねえか」

俺はインクの匂いのする紙面を指で弾いた。

儲かったのは医者と俺だけだ。

渋皮でも噛んじまったような気分がした。

程好く空調の聞いた室内に、柔らかな口調の営業トークと、キーボードを打つ音が零れる。大通りに面したビルの1階、ガラス張りのショールームが俺の職場だ。

俺の本業はOA機器の会社のデモンストレーター。

学生時代は人見知りが裏返った強面で鳴らしたモンだが、今は営業スマイルも板についた。

「それじゃあ、ちよつと自由に触ってみてもらえますか？」  
俺はどこぞの会社の経理だという男性にそう声を掛け、その場を離れた。自宅にパソコンがあるという彼は飲み込みが早くていい。いつもこういう人間ばかり来てくれると楽なんだが…。

しかしもう限界だ。

俺はさりげなく、通りに面した全面窓へと寄って行った。そして外を眺めるフリなんかしつつ、さっきから噛み殺し続けてとうとう臨界点を突破した欠伸をぶっぱなす。これ、もちろん表の通りからは丸見えなんだが、ショーウィンドウでもあるまいしこっちを見ているヤツなんていやしな…。

「…ふ…ああ………あ？」

あ、で固まってしまった俺の胸の下辺りでニイツと笑う顔があった。

俺は思わず飛び退いたが、どうにか悲鳴を上げるのだけはこらえた。

ガラス越しで声は聞こえやしないが、そいつはニヤニヤ笑ったままVサインなんか出してくる。

「このガキ…」

そいつには見覚えがあった。昼前になるとこの辺を通って行くのを見かける。脱色繰り返し返して傷みきったような金髪

が随分伸びて、根元5センチくらいは真つ黒だ。しかも妙に鋭角的に切り揃えてある。服は何と言うか…とんちき、としか言いようが無いんだが、やっぱり個性的とか言うんだろうか。その蛍光色に近い黄緑を着こなすにはものすごく微妙なセンスが必要とされるとは思っただが。

金髪のカキは、しきりに何か言っている。唇を読めば何を言っているんだかわかるかも知れないがそんな労力を使つてやる義理なんか無い。俺はとにかく…本音を言えば恥かしくつて、その場を離れようとする。そうすると、そいつは両手をべったりガラスにくっつけてきやがった。俺はつつい、手垢がついたら嫌だなあ、なんて考える。

俺はしっしつと手で追い払う仕草をする。

と、そいつは首を横に振つて、またVサインをする。なんだか妙だなと思つてそいつの口を良く見ると「イ」って言っているみたいなの…違つ。「イ」じゃない「に」だ。ブイじゃなくて数字の「2」。

『にかいめ』…「2回目」？

俺は口の形だけでそう言つてみる。するとなんだかすつごく嬉しそうにそいつはうなずいた。

『にかいめ』

そいつはもう一度いい、次に欠伸の真似をした。ようやく俺の頭の中でそいつの言いたい事が繋がった。

『ここで欠伸してるの2回目だぞ』…と。

余計なお世話だ、と俺は小生意気な顔を睨んでやる。大体ここで隠れて欠伸してるのなんて2度や3度できくもんか。するとそいつは、悪戯を企む顔で口元に一本指を当てる。『内緒』…ハイハイ、内緒にしてくれるのね、そりやどつちも。

俺が両手を合わせて『感謝』つてポーズを作るとそいつは酷く嬉しそうに飛び跳ねて何処かへ行つちまった。

なんだったんだ？と思うヒマも無く、俺は誰かに呼ばれた。誰かっていうか…いけね。お客さんほっときっぱなしだった。

「何かわからない事でも？」

素早く営業用スマイルを浮かべて小走りに駆け寄ると、いえ、と彼は席を立った。

「大体はわかりましたので…資料を頂いて一旦社に戻ろうかと…」

彼の動きにつられるように時計を見ると、もうじき昼休みになる所だった。俺は説明に使ったパンフレットを社名入りの封筒に積み込むと彼を玄関まで見送る。

彼が角を曲がって行ったのを確認して、中に戻るうとしたその時、丁度廊下の反対側から若い男の声がした。

「毎度さまでーす。マルシヨクでーす」

職員の通用口で怒鳴っているのは、出入りの弁当屋だった。確か先週末ではおばちゃんだった筈だから、人が変わったんだ…と呑気に思う一方で俺は何となく嫌な予感がした。

なんとなく…振り向いてはいけないような気がする。

「梅田さんの変わりの人？」

守衛さんが確認している。

「ハイ！アサクラタイガです！」

元氣一杯のお返事に俺は…俺は、どうしても嫌な予感の原因を確認せずにいられなかった。

「……………やっぱり」

ついに振り向いてしまった俺は、思わず呟いていた。伸びちまった金髪脱色、微妙なファッション、人を食ったような笑い顔。

「今日からお世話になりまーす！」

タイガは…Vサインのガキは…ばっちり俺を見て、そう言った。

「明日からウチのおべんと買ってね」

「そりゃ脅迫か？」

大河はぶるんぶるんと首を横に振る。何だかガキじみてて憎めない。

裏の駐車場はこの時間ガラ空きで、弁当屋の配達用の車を含めて、ぼつりぼつりしか止まっていない。ビルとビルの隙間を抜ける風が冷たくて、ワイシャツ姿の俺は首を竦める。大河は運搬用の大きなプラスチックケースを後部座席に蹴り込むと、ひよこっとなんを指差した。

「だつて、さあちゃんでしょう？」

「へ？」

確かに、俺の名前は「さつき」だけれど、「さあちゃん」なんて今更親でも呼ばない……いや、未だにひとり居るには

居るが。

「俺大河」

「さっき聞いた」

「でもって、ユキくんの学校の友達」

驚いたが、どこかでああやっぱり、と思った。俺を「さあちゃん」なんて呼ぶのもそうだが、この微妙なセンスを何処かで見たと思ったら、ユキのお友達に良くこんなのがいらっしやった。デザイン系の人って私生活までこんなんかよ、とちよつと引いた覚えがある。

「お前、ハタチくらいか」

「お。もう卒業した」

「ふーん」

次の配達先があるんだろうに、いいのかってくらい大河は余裕で喋っている。

「ユキくんにさ、1回ここの会社連れてきてもらった事があって、一番ヤル気の無いのがさあちゃんだって言われてさ。…そんなときもあんた、あのおっきい植木に隠れて欠伸してたんだぜ？」

「悪かったな、欠伸してて。昨日飲んだんだよ。寝不足なんだ。悪いか」

ひひひ、と大河は面白そうに笑う。

「やっぱリヤル気ねーんじゃん」

俺はついムツとした。微妙なガキに上げ足取られるいわれは無い。

「さっさと行けよ。大体何だっけてデザイン学校が弁当屋やってんだ」

「これはバイトっ！！」

途端、脛に激痛が走った。…蹴られた、思いつきし…。蹲って見上げると、愛嬌のある目が釣り上がっている。なるほど、地雷ってワケだ。

しかし、俺は相当情けない顔をしていたんだろうか。いや、確かに涙目になっているのは自分でもわかるんだが。

怒って俺を睨みつけていた筈の大河の口元が段々と弛んできて、そのウチ、肩を震わせて笑い始めてしまった。

「その顔かなりヤバイよ！」

「悪かったなっ。お前ものすごいイイ所に入ったんだぞ、今」

そう言ったらもつと笑いやがる。

「俺もさあちゃん気に入ったかも。ユキくんの言ったとおりだった」

何？と今度は俺が睨む先で大河は車に乗り込んだ。

「顔怖いけど結構可愛いって」

バン！と音を立ててドアが閉まる。

「おいっ！顔怖いってなんだっ！可愛いってなんだ！」

大河は笑顔で窓越しに手を振って、二度クラクションを鳴らして、走り去って行った。

俺は人間の死を感じる事が出来る。

けれどそれはいつでもどこでも誰にでもってワケじゃないくて、やっぱり知り合い中心になる。それは、基本的には得体の知れない力だけれど、注意力とか観察力とか、そういった現実的な要素が作用してくるからだと思う。誰だっで、「こいつは今日機嫌悪いな」とか、「いい事あったのかな？」とか無意識に感じて生きてる。「死」を感じるって言ったらなんだか物騒だけど、結局はそういったもんの延長線なんだろう。

だから、通りすがりの人間の「死」が見える事なんて、滅多に無い。

その「滅多に無い事」がたまたま起こった。

理由は多分…昼間のむかつくガキに「そいつ」が似ていたからだと思う。

ラッシュの時間を少しばかり過ぎた駅の階段で俺はそいつと擦れ違った。擦れ違いざま、俺ははつきりとそいつの死を感じた。

俺は上り、そいつはホームへの階段を下って行く。

…轢死は、やだな。

俺は立ち止まり、顔を顰めた。

基本的に俺は血に弱い。だから事故災害関係の仕事は全パスさせてもらっているのだ。

けれど、若い子の魂はやっぱり迷いやすい。自分が死ぬなんて思っちゃんないから。それを見て見ぬふりするのはどうかと…。

俺はあきらめて、振り向いた。

小柄な…多分まだ「少年」と呼ばれる歳のそいつはリスミカルな足取りで階段を下りて行く。

それに…臨時収入リンジシユウニユウ。

「天使」から斡旋された仕事以外を自主的にこなすと、きちんとその分のギャラが出る。しかも普段よりワリが良いい。

出来るだけキレイに死んで下さい。

俺は両手を組み不謹慎な事を祈ると、今上ってきた階段を下り始めた。少年は丁度最後の段を下りた所だ。

その時突然、ひとつの影が少年を追い越して行った。

数瞬遅れて、少年の体はコンクリートの上に倒れた。

更に一瞬遅れて電車の到着を待っていた人々から悲鳴が上がる。

うつ伏せに倒れた少年の背中には、深くナイフが突き刺さっていた。

…通り魔か、怨恨か。

どちらにせよ、俺はホツとした。轢死者の魂を連れて行った後はしばらく焼肉が食べないからな。

電車のドアの前で座り込もうとしたそいつの頭を俺ははたいた。

「座るな。みつともない」

「誰にも見えてねーじゃんよ。もう」

そっぴいなながらも、ちゃんとそいつは立ち上がった。そして窓の外を見て呟く。

「あーあ。俺逆行きの電車のある筈だったんだけど」

行く所だったのか帰る所だったのか聞きはしないが、流れて行く灯りが人待ち顔に見えて、少々センチメンタルな気分を起こさせる。

「その…服」

着こなすにはかなり微妙なセンスが必要と思われる、蛍光に近いオレンジ。

少年は顔を上げた。耳でおもちゃみたいなプラスチックのピアスが光る。

「こだわり、ってヤツ？」

「別に、ナチュラルだけど」

得意を隠した澄まし顔に、俺は「ウソつけコラ」とつつこんでやりたくなる。

「お前もデザイン学校卒か？」

一瞬呆気に取られたみたいに表情がこわばって、次に不貞腐れて横を向いた。

「…るせえよ」

びくつ、とこめかみが引きつる音がしたが、俺は大人で相手は死人だから、優しく優しく。

「今日お前に似たヤツに会ったんだよ。お前くらい發育不良であんまり外で遊んでねえなって体でまっきんきんの頭してんだけど金がねえんだか根元5センチくらい黒くって、そんな微妙な服着てた…お前、アイツじゃないよな？」

随分長く話していたと思うのに、こうして口に出すと俺はアイツの顔をはっきりとは思いつけぬ気がする。

「知んねーよ」

すっかりヘソを曲げたらしい少年が投げつけるように言う。

「俺みたいなヤツなんか、履いて捨てる程いんじゃないか？」

反抗的で、良く見れば傷ついているようにも見える横顔に、俺は途方にくれる。このガキにじゃない。自分に対してだ。

俺は一体何が言いたかったのか…何を言わせたかったのか。

答えが書いてあるわけじゃないけど、ぼんやりと天井なんか見上げてみる。電車の中吊り広告が振動に合わせて揺れている。

沈黙が続く。

…ああ、そうか。

俺は髪を掻き上げた。

また、八つ当たりだ。困ったなあと俺はわざとらしい溜息をついてみる。今日はあんまり飲めないぞ、まだ月曜日だし。

まだこいつが生きていた時、こいつが死ぬとわかって、俺は何もしなかった。多分何も出来なかったとは思って。仮に呼び止めたとしても、最終的に死から助けてやる事は出来なかった筈だ。俺はそういうのに慣れ過ぎた。

だから何も言わず、何もせず、こいつが死ぬのをただ待った。「死神」だから…これが俺の仕事だから。

「…つまんねーな…」

ふと呟かれた声に振り向く。

と、俺はそのまま固まった。少年の目からつーつと涙が零れ落ちる。

「お、おい…」

泣かした？俺、泣かしちゃったっけ」

「俺、『みんなと一緒』で終るつもりなかったんだけどな……」

「おっさん。俺悔しいよぉ……」

見る見る顔は涙でべちょべちょになって、その上すすつてもすすつても鼻水が垂れてきて、はっきり言ってますっごい顔だ。

俺はこの先の展開を予想して、暗澹たる気持ちになった。

俺は……こういう場合……自分で言うのも何だけど……

ええかつこしいなのだ。

「泣けよ。あの世に行ったらまた泣けっかどうかわかんねーんだから」

言ってしまった……。

途端。

「うわあぁん！」

そいつは俺に抱きついて……つまり涙と鼻水でぐっちょよぐちょよの顔を俺のスーツに押し当てて本格的に泣き出してくれたのだ。これが実体の無い魂だからとあなどってはいけない。実体験上これで何着クリーニングに出した事か。

少し……いや、かなり途方に暮れつつ、俺は緩く細い背中を抱きしめた。

死神稼業の帰り道は、絶対にひとりだ。そう心で呟いて、俺はくすつと笑う。中々の格言、かも知れない。

会社帰りの人並みも途絶えた駅のホームで、俺はひとり立っていた。

案の定上着はクリーニング直行モンで、どうしようもないから脱いでみたが、ワイシャツ一枚でどうにかなる気温じゃない。

俺は肩を竦めながら、階段の影に入り冷たい風を凌ぐ。

電光掲示板を見ると、次の列車が来るまでは、まだもう少しありそうだった。

俺は携帯のスイッチを入れた。  
少し長い呼び出し音の後、いつもと変わらない声が聞こえる。

『もしもし？』

「俺だけど……メシ、どした？」

くすくすと笑つ氣配がする。

『食べたよ今…朝ご飯』

「おい」

今起きた、と照れ臭そうな声がする。

『まだ会社なの?』

「あ、イヤ……昔の仲間につかまっちまってさ……これから帰るけど……」

『ゆつくりしてくれば?』

「いいんだ。もう…電車乗ると」

少しうつむいて、耳を澄ます。

『ふうん……あ、そつだ明後日さ…あ、今話してもいいの?』

「ん。大丈夫」

『そつ?あのさ、明後日仕事終わった後って空いてる?』

「大丈夫…だと思っけど……」

『俺、メ切り終わったしさ、学校行った後一緒に……』  
うんうん、と顔がだんだん弛んでくる。

『買い物して、お鍋作ってよ』  
ずる。

「なんだよお前それ。普通は」一緒に美味しいもの食べに行こう』とかじゃねーのかよっ」

『だから美味しいもの食べようよ。初鍋。ハツナベだよ?』

「俺が作るんだろ?」

『吉野も呼んでさ。あ、お鍋の中身はさあちゃんの好みでいいから』

全く、ユキは言い出したら聞かない。特に食べ物関係。わかったわかったって言ったら、わーいって、お前いくつだよってくらい嬉しそうな声がする。

俺は思わず苦笑して、携帯を切った。

ユキは俺を助けてくれる。

ユキの居る場所が、俺の日常。

二日連続で朝が爽やかくない。

「勝手に飲むな。勝手に読むな」

俺は俊介の手から新聞を取り上げる。……確か昨日も同じ事を言っつて、やらなかったか?いや、昨日は味噌汁で今日はコーヒーなんだが。

「また載つとるやん。昨日さあくん連れてきた子」

俊介は頬杖をつき、俺を見上げるとつとつと目と目を輝かす。

「鼻が高いで、俺も。働きモンの死神に当たって良かったわ。俺もよーやく運が向いてきた」

そうですか、と俺は俊介から取り上げた新聞に目を落とす。

『カメラマンの少年刺される』

朝刊の社会面に結構大きく、写真入りで記事が載った。

写真はどこかの展示会場のようで、彼の作品らしきパネルの前でピースなんかしていた。……頭悪そうだ。

「ふーん」

俺はコーヒートを啜った。窓から入る日差しが新聞のざらついた紙面に、それでも反射するのに少し眉をしかめる。

昨日は少しだけ飲んで…でも相手がほとんど飲まないユキだったから缶ビール一本空けただけで終って…今日の目覚めは中々すつきり、の筈だったんだが。

で、ユキはというとまだ寝ている。卒業制作期間とは言え、朝は起きろよ。モーニングコーヒークらい一緒に飲んでくれる気は無いのかね。

何て思っているとタイミング良く俊介が鼻を膨らませた。「んー。ええ香りやね。やっぱりコーヒーはブルマンに限るわ」

あ、こういう会話ちょっと嬉しいかも。なんて思った自分が嫌だ。

「臨時ボーナスは倍率ドン！で更に倍やでー！嬉しいなー」

無邪気なコイツの笑顔には確かに救われる部分もあるのだが、

「人が死んでるんだぞ」

ついつつかかってしまうのは職業病だと思って下さい。俊介はぱかっとなら口を開けたまま俺を見ている。俺はつい意地悪を言いたくなる。

「お前と同じ年位のヤツが死んでるんだぞ。何にも感じねえのか」

それは自分に向けた言葉でもあった。

俺は気づいている。

段々、仕事を終える度に感じる痛みが薄くなっている事に。

「そらまあ……ありがとおって」

ダン。

俺はワザとテーブルと叩くようにして立ち上がった。

「仕事行く」

「まっ、待ってやっ……」

俊介も立ち上がる。

「ユキが起きる前に帰れ」

昨日も同じ事を言った。

「なあ、待ってやさあくん」

「さあくん言うな」

どっかの弁当屋を思い出すから。

「しゃあないやんか、仕事なんやから」

俊介が何故かしつこく追いつがってくる。

「お前はそうかも知れないけどなあ！」

俺は立ち止まり振り向いた。勢い余って俊介がぶつかって

くる。鼻を押さえて見上げてくるマヌケ顔に俺は言った。

「…俺は副業なんだ。食えるんだよ、死神辞めてもっ！」

ユキに聞こえないよう、声を押し殺す事だけは忘れなかつ

た。俺は何か言いかけた俊介を待たずに背を向け、洗面所

へ入る。

「せ、せやかて……」

取り残された俊介の音が、壁を隔てて少し籠って聞こえた。

「せやかて、仕事なんや！」

その日、大河は弁当を届けに来なかった。

夕ご飯をユキとふたりで食べた。すごく久しぶりな気がする。

「ユキ……」

肩を引くと煩そうに振り払われた。ユキはテレビの動物番

組に夢中だ。

「ユッキー」

邪険にされているのになんだか面白くなって、俺は更に肩

をつんつんとつつく。

「なーに？」

面倒そうに、それでもやっとユキが振り向いた。

「顔見せろよ。お前最近夜昼逆転で全然顔見せてくん

かったろ」

「じゃあこっちおいでよ。そっち向いてるとテレビが見え

ないだろ」

そう、位置関係を端的に現すなら、テレビ、ユキ、俺、と

いう順番で並んでいるのだ。

「やあだね」

俺はソファから動きたくない。

「じゃあダメ」

ユキはくるっと顔をテレビの方に向けてしまう。俺は恨みがましく言う。

「俺よりコウテイペンギンが好き？」

「うん」

「俺よりゴマフアザラシが好き？」

「うん」

「俺よりシロナガスクジラが好き？」

「……………さあちゃんっ」

ついにユキが振り向いた。

「さあちゃんうるさい。落ちついてテレビが見られないだろっ?!」

ソファに飛び乗って俺をくすぐってくる。

「わ、待て！そこはダメっ」

ユキはテクニシャンだ。くすぐり勝負で買った事が無い。それでも嬉しかった。

「いつまでも子供なんだから、さあちゃんはっ!」

そう言われても仕方ない。返す言葉が無いので笑い続ける。

『かまって欲しい』だなんて、子供以外のなんでもない。

その時、電話が鳴った。

「ほら、さあちゃん嫌いから電話が来た」

「そりゃ関係無いだろ」

変な責任を押しつけてユキが立ち上がる。

受話器を耳に当て、2、3言葉を交わすと、

「さあちゃん……」

ユキが微笑を浮かべ振り向いた。

「お母さん」

「あ…子機にちょうだい」

俺は自分の寝室へと戻る。それは、ユキのテレビ鑑賞を妨げない為であり……繰り返される母親との争いを聞かせない為であった。

大学の2年で俺は家を出た。ユキとの同居もその時からだ。その頃にはもう俺は死神で、一人暮らしを始めるにあたって、親からは一切の援助を必要としなかった。

「あんた、まだあの子の面倒みてるの？」

何年たっても同じ言葉の繰り返し。

「母さん達に迷惑かけてないだろ？」

「そんな事を言ってるんじゃないでしょ」

次にくる言葉なんて、一字一句間違えずに言える。

「弟がお兄ちゃんを学校に行かせてやってるなんて、おかしいって言ってるのよ」

俺が溜息をつくのも段取りのウチだ。

「だって金出すの嫌がったのは母さん達だろ」

向こうも負けじと溜息をついてくる。

「お金の問題じゃないでしょ。折角大学に入ったのに1年も行かないでやめちゃって、今更絵を描きたいだなんてそんなの、賛成出来るワケないんだから」

ユキは大学に入って、所謂不登校になった。

「元々ユキは絵をやりたかったんだよ」

「だったら最初っからそう言ってくればこっちだって

…」

この会話が後何年続くのだろう。

「まあ…もうしょうがないけど。それでね今日は…あの子、就職は決まったみたい？」

「おや、と俺は瞬きをした。これは新展開だ。

「いや、まだみたいだけど…」

「だったらね、もういいから、卒業したらウチ帰って来なさいって。お父さんの知り合いの所でね人探してて、幸宏なら口効いてくれるって言うから…」

「それは…絵に関する仕事？」

「え？さあ……」

「母さん」

俺は深く溜息をついた。

「それじゃあ大学ん時と同じだろ」

「あのねえ、世の中好きな事だけやって生きていけるわけじゃないのよ。大体、いい歳なんだから、使ってくれる所があるだけ…」

「母さんっ」

俺は溜まらなくなっ言葉を遮った。少し口調がキツかったのか、電話の向こうで戸惑っている気配がする。

「ごめん。…切るよ。ユキの事は心配しないで。あいつがやりたい事を出来るようになるまで、俺が食わして行くから」

「だからそれが間違ってるって言ってるんでしょっ！」

今度は、俺が言葉を失う番だった。そして、オロオロとした声が聞こえてくる。

「…あんたは、あんたのやりたい事をやりなさいよ。母さんは、あんたが幸宏の犠牲になってるような気がして…」  
俺は、クスッと笑った。

「それは、心配ないよ。俺はユキと一緒に居たいんだから」  
「あんた、それじゃあ……」

多分、何も続く言葉が無いんだろう。接続詞ばかりが空回りする母さんに、俺は言った。

「違う、ユキ以外、俺と一緒に居てくれないから」

空気が凍る気配がする。

「母さん……」

俺は機嫌が悪い。何回も同じ言い争いをして、その2割位にしか使わない切り札を俺は使った。

「まだ、俺が怖い？」

「……五月」

小さな小さな声がした。

電話を切っても、俺は居間に戻る気に慣れなかった。  
ベッドに仰向けに倒れたまま、天井をぼんやりと見上げる。  
やめない。

俺は死神をやめない。

もちろん嫌な仕事だ。その後味の悪さ紛らわす為に飲んで、次の朝辛くて、本業に支障をきたして…ってイイ事無いんじゃないか。

俺はクスッと笑う。

何度も繰り返し返してきた自分への問いかけ。こんな仕事辞めようか？そして決まりきった答え。

やめるワケにいかない。

例えばこの家。最寄り駅から徒歩1分、4LDKの新築マンション。こんな所に本業の方の給料だけで住めるワケが無い。…別に道楽で高級マンションに住みたいって言うてんじゃないんだ。唯、ユキとお互いのテリトリーを侵食せずに暮らすには、これくらいの広さが必要だったワケで。

俺はドアの向こうで呑気にテレビを見て居る筈の同居人の顔を思い浮かべる。

これ以上狭い部屋へ越す事は出来ない。互いに、特にアイツは、どんなに気を許した相手でも自分一人の空間を必

要とする人間であるのはもう仕方が無い。それは兄弟である俺が相手でも同じ事だ。この部屋を守れなければ、別れるしかない。

だから。

部屋代の為、生活費の為……金の為金の為金の為、それが仕事だからしょうがない。

俺は寝返りを打ち、横を向いた。

俺はあいつを手放せない。

視線の先にあった鏡の中には、どうやってもくたびれたサラリーマンがぼけっとしていている。元は結構良い筈なのに。まだまだ若い筈なのに。

この生活を守る為には……部屋代と生活費とその他諸々と、あいつに心配かけないくらいに余裕を見せる為には、副業の方の収入を絶つわけにはいかない。

現実の景色が視界からどんどん遠ざかって行く。思い出す……忘れられない記憶。

母さんが、重い病気をした事があった。それまで病氣らしい病気をした事が無いと言っていたが、その分シヨックは大きかったらしい。

一番苦しい時だったから、と父さんは言った。けれど、忘れない。お見舞いに行つた俺を見るなり歪んだ表情。それは恐怖だと、あまり大きくない俺にもわかった。何故そんな顔をするのかはわからなかったが。

「見ないで」と母さんは叫んだ。

俺には死が見える。

悲鳴を上げて母さんは布団を頭から被つた。

もちろん、母さんに死なんか見えなかった。

だから、それを告げようと……いや、訳もわからないままに、怖くて、ただ必死で母親にすがつたその時、すごい力で振り解かれた。肩が痛んだ。隣のベッドに叩きつけられたのだと気づいた時には涙が滲んでいた。

そして俺は理解した。

母さんは、俺が怖いんだ。

それに気づいたのは俺だけではなかった。

助けを求めて見上げた父さんの目に、母さんと同じ色が

沸き上がったのを見た。

ふつ、と俺は溜息をついた。

俺にはユキしかない。

心でもう一度呟く。

その後峠を越えた母さんは、順調に回復していった。やがて退院の日取りも決まる。

母親がいないというだけで、きちんとやっっているつもりでも自然荒れて行く部屋の中や、看病と仕事の両方に追われる父親の苦労や、人一人ぶん空いた空間の寒さや、そんな生活が終りを告げるのは嬉しい筈だった。

けれど、母親の帰りを待ちわび、笑顔やおしゃべりや久しぶりに作ってくれるご飯なんかを楽しみに思い描いていると、その背中を、ちくりと棘が刺すのだ。

…あの後、母親には会っていた。ずっと体調が回復してから。

母さんは俺に謝った。

抱きしめて、真っ直ぐに見つめた。

もう大丈夫。その時俺はホッとした筈だった。

けれど、

何かのはずみで『それ』は顔を覗かせるのだ。『不安』よりもまだぼんやりとした居心地の悪さみたいな物が、スツと心が冷めた時に話掛けてくる。「安心していいの？信じていいの？」…それは、影みたいな物だった。普段あることに気づかないのに、決して離れる事は無い。

俺は、いつ突き放されてもおかしくないんだ。

俺は、怖がられるんだ。

ようやく俺は、自分の妙な能力が秘密にしておかなければならぬ物だと気づいた。遅過ぎたけれど、それだけ俺は幸せだったんだ。

俺は他人と距離を取る事を覚えた。それは家族であつても同じだった。……なのに。

「怖くないよ？」

ユキは平気でそばに寄って、手を繋いで来る。

「うそ言つな。お前、後三日で死ぬって言われたら、怖い

だろ」

あまりにも当然のようにユキが言うので、俺は訳もなくムキになっていたらしい。

「死ぬのは怖いけど、さあちゃんは怖くないってば」

「なんでだよ」

「カレー作ってくれたから」

……兄の知能の発達に疑問を抱いたのはそれが最初だった。

「か、カレー？」

うん、とユキはうなずく。

「お母さんがいない時に、俺食べたといって言ったらさあちゃんカレー作ってくれたじゃない」

「カレー作ったら、怖くない？」

探る様な目をした俺にユキは大きく頷いた。

「さあちゃん！俺、今度はカツ丼が食べたいな！」

俺の存在理由はカレーとカツ丼に化け……。

「さあちゃんっ！！」

「ぐえ」

ぼーっとしている俺の腹にユキがボディーマッサージをかけた。

「ぎっ、ぎぶぎぶ」

バンバンとベッドを叩く。

「勝ったー」

ぴよこんと起き上がって、ガッツポーズをする。そんな子供じみた仕草を横目に、俺はげふげふと咳をした。

「んだよ、重てえな。太っただろ」

「さあちゃんがひよわになっただんでしょっ」

……まあ確かにこここのところ体力が落ちて……ってそれは関係ない。

「何か用か？」

「明日の鍋の話」

「ああ」

こいつの頭には食べ物しかないんだろっか。

「吉野に連絡した？」

「あっ、やべっ」

俺は飛び起きた。電話を掛けようとする俺に、しょうがないな、とユキは肩を竦める。

「俺電話しとくよ。ビールとか持って来てもらおうんでしょっ？」

「ああ、頼むわ」

ユキは居間へと消える。

「……………あっ」

寝室に静けさが戻った時、俺はとんでもない事に気がついた。

「具、決めてないぞ……………」

そういえば卓上コンロのガスも予備が無かった気がするし。買う物メモしとかねーと…………。

居間からはつけっぱなしのテレビと電話中らしいユキの声が微かに聞こえてくる。

ここに俺の日常があった。

こっちが、俺の日常なんだ…………。

「おっはよおさあくん!!」

「……………お前は毎朝毎朝……………」

朝一番でキッチンに入ると、今日の俊介はヤクルトの一気に飲みをしていた。そしてユキはまた寝ている。

「さあくん!鼻が高いで、俺は!働きモンの死神に当たって良かったわ。俺もよーやく運が向いてきた」

「……………今日は何たかりに来た?」

俊介は妙にハイテンションだ。俺の嫌味なんかは聞こえてない風で、俊介はにゅっと顔を突き出して来た。

「でかいヤマ任してもらえそつやで」

俺はそのデコを押し返す。

「お前は刑事か」

俊介はへへと笑って、ポケットから一枚写真を取り出した。

「これが次のターゲットや」

「殺し屋じゃねえんだから」

俺は不機嫌にその写真を取り上げた。写っていたのは…………目の前の俊介と、弁当屋と、死んだガキと、同じ年くらいの少年だった。

「またかよ……………」

若年層はしばらくお断りしたい気分なんだけどな、と俺が頭を抱えると、俊介は得意げに説明を始める。

「今回はなー、今までとはちょーっと違うんやで!ただ魂連れて行けばいいのんとちゃう。ホントやったら勤続20年くらいの死神やないと任せられん仕事なんやけどなー……………」

俺は軽く溜息をついて、写真をテーブルに置く。

「要は、前途ある若者の未来を掴むお手伝いだろ。そんなモンにデカイも小さいもあるか」

俺は俊介を無視して、流し台に置いてあった食パンの枚数を目で数える。今日はトーストでいいや。

「…さあくん…」

戸惑うような声はまだ全然少年のそれで、罪悪感を覚えないう事も無いが、構っていられる気分じゃない。

「それに、今日ならお断りだぞ。先約があるからな」

「先約て何？」

「ユキと鍋」

「アホかあ！」

背後から俊介の呆れたような声が出た。

「男が仕事に家庭持ち込むな」

「うつせえよ」

俺は振り返り、俊介の肩を抱き寄せ耳打ちした。もちろん甘い囁きなんかじゃなくて、思いっきりドス聞かせて。

「こっちはあくまで副業なんだからな。自分の時間を削ってまで仕事する気はねーよ」

そう言っただけ放すと、俊介は心底呆れた。いや、結構軽蔑入った目で俺を見た。

「兄貴と鍋すんのがそんなに大事か」

「俺はユキが大事」

げっ、と俊介がうめくのが聞こえた。

「美味いの作って、喜ばしてやんないとな」

嫌味のように笑ってやる。

「勝手にせえや。マイホームホモ」

吐き捨てるような俊介の声に「どういうしつけされたんだこのガキやあ」と思ったが、心の何処かが「上手い事言っなあ」と感心していた。

昼休み。

俺は晴れた空に煙を吐き出す。食後の一服はやはり欠かせない。会社の裏手にある駐車場は、お気に入りの喫煙所だ。

イヤな時流に乗りやがって、社内は全面的に禁煙。苦し紛れに見つけ出した場所だけど、これが中々良い具合。中通りに面した入り口以外、総てビルに囲まれた小さな駐車場だ。胸までのフェンスに凭れて灰色のコンクリートに切り

取られた空を見上げるのは、映画のワンシーンみたいで気分がいい。そんなシーンの出てくる映画なんて見た事ないんだけど。

ひとつ、大きく息を吐いてほとんど口癖のような独り言を呟く。

「辞めよっかなー」

俺はぎよっとして右を見た。今、独り言がステレオで聞こえた気がしたのだ。

そしたら、右にいた人間は俺を見てぎよっとしてる。

「今、『辞めよっかな』って言った？」

「お前いつの間に……弁当屋」

鉄柵によしかかって、やっぱりタバコをふかしていた弁当屋は苦い顔になる。

「朝倉大河！一回で覚えるジジイ」

俺は金髪に容赦無く拳を落した。

「昨日どしたのよ」

「そーしき」

ああそりゃご愁傷様で、と俺はもごもご呟く。

空に上って行く煙が2本になった。今日は、無風なのか。

「お前仕事いいのか？」

大河の足元には弁当を入れて来たプラスチックのケースが置きっぱなしになっている。

「いいんだよ。ここで最後なんだから」

一服くらいつけさせろ、とヤツは横柄に言う。手には丸めたスポーツ新聞。くつろぐ気満タンだ。

その割には表情が渋いが…。

「辞めるって、何をよ？」

「あ？」

異な事を、というように大河が聞き返す。

「今言ったる。やめるって」

気のせいかな『やめる』が『辞める』になっていた気がするんだが。

大河は顎をさすりながら少し考えて答えた。

「バイト」

「弁当屋か」

少し間があって、コクンとうなずく。長い髪が表情を隠した。

うなずいたまま頂垂れて、大河は呟く。

「もしも、今俺が死んだら」

嫌な話題だ。けれどうつむいた大河にも俺の表情は見えていない。

『死亡したのは、アルバイトの男性・朝倉大河さんで…』

とかに、なるのかな？」

「そんなとこじゃねえか？」

何が言いたいんだかわからないまま、触れたくない話題を持ち出すこいつに苛立ちだけが募り、俺は声に不機嫌を出さないよう苦勞する。大河はやっぱりな」と呟きつつ、だらりとフェンスに突っ伏した。

「…辞めちまおっかな」

「んだよ。今バイト辞めたって『アルバイト』が『無職』になるだけじゃねーか」

突然、ガバツと大河は起き上がった。真っ直ぐ睨みつけてくる目に俺は一瞬ひるむ。謂れは無いと思うが…大河は完全に怒っていた。

「…これっ」

そして突如として持っていた新聞を俺の胸に叩きつける。勢いに一瞬息が詰まりながらも、俺はそれを受け取った。

新聞はあるページで開かれたまま、折りたたんであった。

俺はそれを伸ばす。その途端に、見たくなかった文字が目飛び込んで来た。

『刺殺の美少年カメラマン遺作出版へ』

思い当たる所のある記事だった。

「あいつ…」

俺は思わず呟く。昨日の新聞に比べると少年の略歴が少し詳しく載っている。なんだかのコンテストで入賞が内定していた矢先だったとか、友人達の熱意で写真集の発売が決まったとか、発売に合わせた個展が開かれるとか…。

「…なんだよ」

俺は知らずに大河を睨み返していた。

「知り合いか」

「ちよつとだけな」

案外素直に大河はうなずく。

ああ、だから『そーしき』なのね、と頷いた俺の胸を、大河の拳がいきなり叩いた。

「俺の方が撮れる！」

うつ、と物理的な胸への衝撃だけではなくて俺は息を止めた。こいつ、カメラマン志望だったのかと今更気づいた。

どん、どん、と二度三度俺の胸を殴る。その力は次第に弱くなつて行つたが。

子供の癪癪…大河のきかん気な顔はまさにそれを思わせた。けれどそんなストレートな感情をぶつけられたのは久しぶり過ぎて、結構、来る。

「けど…お前…」

何が言いたいのかわからないままに、俺の口だけが動く。

「友達、だつたんだ」

「違えよ」

大河の眉間に皺がよる。

「俺が…勝手に意識してただけ。顔合わせた事は何回かあつたけど…」

確かにそういう事つてあるのよね、と俺は何処か遠くで思う。

「俺の方が撮れる！俺のが……。俺、だけじゃなくて、皆…あいつよりもっと本気なヤツなんて幾らでもいるんだ！」

「いや、でも…」

「なのになんでこいつが『カメラマン』とか呼ばれてんだよ…」

大河の手から、火がついたままの煙草が落ちて行くのを見た。そして、

どん！

俺の胸に握つた両手と、大河の苛立ちが一緒にぶつつけられた。

俺は、とまかく衝撃に耐えてどっにかそれを受けとめる。

縫りつく、と呼ぶには少し他人行儀に、俺の胸の上で大河の手が震えている。

「それは…死んだからだろ」

自分で言つてどうしようもねえな、と思つた。そしてようやく「今死んだら…」とのつながりが見えた。

大河がうなずく。

「そつだよ…こいつ死んだから…死んだ時他に何にも…バイトもしねえでただ撮つてられたから！『カメラマン』つて呼ぶしか無いんだよっ…そんだけじゃねえかあっ…」

俺は、持ったままだったタバコを地面に落した。半分大河を支えたまま、どうにか足で揉み消す。

「悔しいのかよ」

俺は、ゆっくりと大河の肩に手を回した。電車の中で、あいつにしたように。…振り払われるだろうと思ったが、意外に大河はそのままおとなしくしていた。

そして、俺の言葉に小さくうなずく。

「バカかよ。新聞なんて、一番分かりやすい言葉で人間にラベル貼るもんだ。…本当の事は、お前の方が良く知っているんだろ？」

「本当なんて知らないヤツの方が世の中には多いんだよバカ」

可愛くねえ、と思ったが鉄拳は勘弁してやった。

「知らねえヤツには、これが真実じゃねえか」

大河の肩を抱くのと反対の手に持ったスポーツ紙が、力を込めた拍子にカサリと鳴った。

『悔しいよ…』

泣いていたあいつを思い出す。あいつはあの世で、自分がどんな肩書きで呼ばれたのかを見ただろうか。多分それは、あいつが望んでいた「名前」に違いない。

『みんなと一緒、で終るつもりじゃなかったんだけど』

その言葉を伝えたら、大河は楽になれるだろうか。

「悔しいよ。悪いかよ」

同じ言葉を、同じような態勢で呟く、似たようなチビを俺は緩く抱きしめる。

あいつの言葉を伝えたら…：大河も納得するだろうか…：いや、

「真実は、本人だって知っている」

俺は、あいつの為に、真実を伝えたいんだ。

あいつは自分がホンモノではない事を知っていた。あいつは、こうして自分が『カメラマン』と呼ばれる事など想像もしてなかった。だから、涙と鼻水でぐちゃぐちゃの顔で泣いて、そんなあいつを、タナボタみたいに言われるのが嫌なんだ。

けれど、何もわかっていない大河に腹を立てているのかと言えば、それも違う気がした。大河にも伝えたい。楽にするとか何とかじゃなくて、ホントウを。

だってこいつなら…こいつらなら、真実が伝われば…。

胸にせり上がって来た思いを、俺は上手く言葉にする事が出来なかった。

俺は大河の髪を掻き乱す。

人間に縋りたい思いでいっぱい、強く抱きしめる。  
真実が伝わればいいのに……どうして「死人に口無し」なんて言葉があるんだろう。

出来るんじゃないのか？

ふと、誰かに囁かれた気がした。

俺なら、出来るんじゃないのか？

最後に死者と言葉を交わす死神なら。

俺は、視線を上げた。

俺になら、出来る。

俺にしか出来ない。

俺はすごいスピードで記憶を辿っていた、死神になってからこれまで、そう言えば一度も、

仕事に関して口止めされた事は無い。

もしも、あいつの言葉を大河に伝える事が、プラスであるなら……いや、断言する。絶対に「お互い」プラスに変える。「JUSTICE」。

なら……いいんじゃないのか？そうするべきなんじゃないのか？

俺だけが伝えられる、真実を……。

大河が身じろぎするのを感じた。

俺は我に帰る。心臓がすごい早さで打っているのに気づいた。

今なら……俺は……。

一度、目を閉じる。大河の息遣いを感じる。そう言えば抱きしめた時あいつも息をしていたのだろうか。

俺は、ゆっくりと目を開け、大河の肩を両手で掴み、引き離れた。

涙に濡れた目に、少し笑って見せて。

「あいつも、悔しがってた……」

え？と大河が聞き返してきた。俺は視線を逸らす。

唇に浮かんだのは自嘲なんだろう。

「今晚、ヒマか？」

「えっ？」

大河が盛大にハナを睨り上げる。

「今晚、鍋すつからさ、ユキもいるし、もうひとり余計なものもいるけど……来ないか？」

大河はもう一度ハナを睨り上げた。

「えへ？そう？」

ぐちよぐちよと手で顔を拭う。本当に小汚いヤツだ。

「ナニ鍋？俺チゲ鍋が好きだなあ」

泣いたままで、にたあつと笑つ。

「じゃあ、そうしようかな…」

俺はコンクリートの地面に視線を落としたまま、呟いた。

言えなかったのは、全面的に俺の弱さなんだろう。

自分を「変なヤツ」と思われなくなかった気持ちだが、知らんフリをさせた。……何が、見えた気がしたのに。

と、その時携が鳴った。

「用事なら昼休み中に言ってくれよ」

携帯から聞こえてきたのは、耳慣れた関西弁だった。まだ朝言っていたデカイ仕事とやらの話を繰り返している。

そばにいる大河の前で専門的な話も出来ず、かといっていいかげんな返事も出来ず、気がつけば昼休みも終り近い。

…結局電話では話がつかなくて、緊急を装って外出させてもらった。

「夜は用事がある、言うてたから昼間のウチに話済ませようとしたんやん」

待ち合わせた公園で俊介は頬を膨らませる。

オフィス街を分断する大きな公園は、夏場には日を置かずにイベントが行われている賑やかな場所だが、こんな中途半端な時期にはやはり何処と無く物寂しい。

外回りのサラリーマンが急ぎ足で通り過ぎていく姿もどこか寒そうだ。

「今度の仕事はちよつと遠出になるんや。今日のウチに切符手配しとかんとあかんから」

そう言つて、恨みがましく俺を見つめる。

「一応さあくんの意思確認しとこと思つたんやん。……ホントに嫌やつたらしやあないもん」

俺は溜息をついた。

「俺は勤務時間中だ」

「こつちだつて仕事やん」

「そつちは副業！」

強く言い放つと、まだ子供臭さの残る顔がきよとんと俺を見つめている。

俺はわざと呆れたように溜息をついた。

「…これ以上、仕事に差し障るようだったら、考えさせてもらう」

残念ながらこれは…ただのハッターだが。だが俊介は動じなかった。

「なら辞めたらええやろ」  
不思議そうに、口元に微笑さえ見せてそう言う。ああ、そんなモンかよ俺は。…気が軽くなるようでいて、突き刺さった痛みが消えない。

そうだよ。そんなモンだ。俺なんて。

けれど、俊介はまたぶらぶらと歩き始めながら付け足したのだ。

「五月くんがいなくなつて、会社なんて潰れへんて。死神一本でやつたらええやろ」

「おい！」

俺は俊介の襟首をひつつかんでいた。

公園とは言え、周囲はオフィス街だ。通りすぎる人は少なくない。背広姿が少年を締め上げているなど、全く穏やかじゃないが。

「俺の選んだ仕事だ。ガキがわかつたような口きいてんじゃねえよ」

俊介が苦しそうに顔を顰める。『選んだ』なんてご大層なものじゃないのは俺自身が一番良く知っていた。

「せやかてっ！」

俊介は少し弛んだ俺の手を引き剥がし、睨みつけてくる。

「あのパソコン会社に五月くんの代りはおるけど、俺には五月くんの代りはおらへん！」

俊介のヤツは大真面目だ。

真面目なんだが…

俺は口元を手で覆った。

「それじゃ愛の告白だバカ」

「あ……」

俊介の顔が一気に赤くなる。

「お、俺は、あんたみたいなおっさん好みとちゃうわ」

「誰も本気にしてねーよ」

俺は俊介の頭をこぼく。

どこかの会社のガラス張りの玄関に、俺達の姿が写っていた。

「……なんでやねん」

ぼつりと、俊介は呟いた。

「給料かてこつち一本で食べるだけ払うとるやん」

「給料の問題じゃない」

「仕事かて、キツないと思うで。時間やて繁忙期以外はかなり自由やと思うし……」

「そついう問題でもなくて」

「さあくくんが、ホンマは人が死ぬとこなんて見たないんは知ってるけど…」

「そうじゃない」

俺は、俊介の肩に手を置いた。そのまま少し、力を込める。

「…そうじゃ、なくて…」

見上げてくる俊介から視線を逸らし、俺はうつむき加減にアスファルトに転がる枯葉を見ている。

秋の柔らかな陽光を反射するたくさんノビルと、

その間を擦り抜けて行く、急ぎ足の靴音と、

規則正しく変わる信号と、

会社に戻ったら待っている、午後の仕事と、

毎日毎日変わらない、退屈で退屈で退屈な繰り返し、

…それらが大切なんだと言ったら、俊介はどんな顔をするだろう。

「もし、俺が会社を辞めて、死神だけやるようになって…」

俺はゆっくりりと視線を俊介に戻す。

「そしてもし、死んだら」

不安そうに、俊介の目が細められる。

『もしも、今俺が死んだら』

俺は誰かと同じ言葉を繰り返す。

「俺は、どんな名前で呼ばれると思う？」

「そんな関係無いやん」

「無いワケねーだろっ」

当然のように答えた俊介の肩を、俺は強く握っていた。

「死神なんて得体の知れねーもんで、一生を終れって言つのか？」

「得体の知れない…？」

俊介の目に怒りの色が宿った。

「よう言うわ！得体…知れへん、かも知れへんけど…！そ

やけどっ！立派な仕事やんか！」

俊介は俺の手を振り払う。

「俺が知ってる！さあくくんようやったって、今際の際には言つたるわ！後、吉野くんかて知ってるやないか！後、自分と！」

どこかで聞いたような言つたような言葉。

『新聞なんて、一番分かりやすい言葉で人間にラベル貼るもんだ。…本当の事は、お前の方が良く知ってるんだろっ。』

俺の言葉はどれだけあいつに届いたんだろっか。今こっつして、俊介の言い分がある程度正しいとわかっていながら、うなずけない自分のように。

「今まで言わへんかったけど、五月くんは、死神の才能あるねん。向いとあねん。…死神かて生きてる人間なんやから、あの世の事情話すのんは絶対アカンのやけど…だからあんま詳しく言えんのやけど、五月くんが連れてきた魂は、ええ色になってんねん」

俺はちよつと目を眇めた。途端に俊介が拝むようなポーズをする。

「ホンマ、これ以上は堪忍して。ホンマ堪忍。けど、五月くんはええ仕事しとるな、って評判や。給料かて、他の死神より割増で払つとんねんで？」

誰かに仕事を認められる事が嬉しくないわけじゃない。けれど、俺は俊介と吉野の天使以外に関係者を見た事が無いし、『あの世の入り口』の玄関先以外の場所を見た事が無い。結局は『得体の知れない団体』以外に感じようが無いのだ。吉野を信用していなければとてもじゃないがやって来れなかった。おまけに「才能がある」だの「向いてる」だの言われたって、自覚出来ないんだからなんの張り合いも無い。

「そんな得体のしれないモンで褒められたって嬉しくねえんだよっ！」

ずっと、騙してやってきた気持ち、外へと弾けた。

……誰かが、俺達を見咎めているのかも知れない。けれど、そんなものを心配する気持ちにはなれなかった。どうせ、俺は得体が知れない連中の仲間だ。

気になるのは、今まで見た事もなく萎れていく俊介の表情で、

「得体：知れへんもんは、何言つてもあかんのか？」

ズキリと言葉が胸に突き刺さる。

「得体知れへんもんの言葉は無いのと一緒なんか?!」

浮かび始めた涙を隠すように、俊介は元々大きな目を更に見開いた。

「せやかて黙らんぞ。黙つたらへんぞ。何べんでも言うた。得体の知れへんかも知らんけど、電話帳の職業欄の載れへんけど死神はなあ、五月くんは誰かの役に立ってんねん！誰かの為になつてんねんよっ!!」

気分が昂ぶっていた筈なのに、すごく懐かしい言葉を聞いたような気がして、俺の心の奥が暖かくて悲しくなった。

「誰かの為に」とか「みんなの為に」とか、小学校くらい

の時には良く言われた気もするけど、いつの間にかそんなのは記憶の彼方に消えていた。「誰かの為に」なんて、本当は思い上がりだと思って、あきらめてた。

勢いを失った俺に、俊介は畳み掛けるように言った。

「五月くんが連れてきた魂も全部、他の人には見えへんから触れへんからって、それも全部得体の知れないモンやつて、無かった事にするんかい！」

「違う！」

反射的に言い返した自分に驚いた。

俊介までがきよとんとしている。けれど、腹の中が、熱い。怒っているんだと思った。

「違う。全部本当だ」

だって、俺はちゃんと見たんだ。ませガキの涙も、カメラマンの卵の悔しさも、全部。

「無かった事になって出来ねえよ！それは、生きてる人間に失礼だろうが！」

あの母親も、大河も、

「くたばった人間はそこまでだけど、生きてる人間がそれからにすんだよ！」

もしも大河が、この先本物のカメラマンになったとしたなら、

「死んだヤツには何にも出来ねえけど、生きてるヤツが意味作るんだよ！何にも出来なく無いんだ！絶対そこに居たんだっ！！！」

俺は、顔を覆った。指先が痺れている。何を言っちまったんだか良くわからない。もしかしてすっげえ頭悪い事を言っちまったのかも知れない。カツコ悪い。……何も出来なかったクセに。

気味悪がられるのが嫌で、大河に真実を言う事が出来なかったクセに。出来る事があつたのに、しなかったクセに。

だから俺は、

俺は「本物」じゃないんだ。

と、風みたいな声が出た。

「嬉しい……」

呟いたのは、当然というか、俊介だった。

今までの必死の形相も、いつもの人を食ったような顔もそこにはなくて、すごく……すごく、清潔な笑顔を浮かべていた。

「死んだモンも、何か出来るんやなあ」

俺は目を疑った。俊介の背に音も無く羽根が生えた。白い、白い大きな羽根…。

「天、使……？」

俊介はゆったりと頷いた。俺はただただ呆然とする。だって「天使」ってそういう意味じゃなくて、俊介だってつきり高校生のバイトだと思ってたし。

そんな俺の胸中を無視して、俊介は満足そうに笑う。

「俺、ちよっと自分の仕事に自信無くしとった。魂なんて吹けば飛ぶようなもん相手にして何の意味があるんやろ、て。五月くんの事笑えへんなあ、ホント」

って、自分だけで納得されても困るんですけど……。

「ありがとお……怒らんで聞いてな？」

俺は、瞬きをするしか出来ない。

「今の言葉、『死神』のさあくんにしか言えへんよ。…ヤかも知れんけど、本当やよ…」

羽根の白が…真白が視界を覆ってもう何も見えない。

「さあちゃん？」

呆然とした、聞き慣れた声が耳に届いたのは、その時だった。

「あ………んげっ！」

「げ………」

俺と俊介は同時に振り向き、同時に絶句した。

落ち葉もあらかた落ち切った遊歩道に、何故か必死の形相で立っていたのは…。

「ゆ、ユキ……」

「は、はじめま……あ、イヤ、えっと……」

俺は途方に暮れ、俊介は取り乱す。

そしてユキは、

「はじめまして俊介くん。兄の幸宏です。五月がいつもお世話になってます」

身動きの取れない俺達を前に、俊介に向かって深々と頭を下げた。

「え、ええっと……」

俺は無意識にユキと俊介の間に割り込むようにしていた。

「………なんで、お前俊介を……」

言いながらユキの表情を覗う。ユキは、妙に意志の固そうな表情を変えない。

「さあちゃんは、ちょっと黙ってて」

「は、はい…」

見た事無いっ。こんなユキ見た事無いぞっ!!

「俊介くん」

「はい!!」

視線を向けられた俊介が思わず背筋を伸ばす。気持ちはわからなくないが…。

俺の目はいきなり、すっかり忘れ去っていたものに吸いつけられた。

血の気の引く音がする。

『はねっ!!!』

俺は口の形だけで俊介に向かって叫んだ。同時に自分の背中を刺す。一瞬首を傾げた俊介は、あ、という顔をして手を左右に振り、やはり口だけで『見えてへん見えてへん』と言う。

うん、多分また関係者以外には見えないってヤツなんだろう。俺は少しホッとする。けれど、

「俊介くんって、本当に天使だったの?」

「ええっ?!」

俺と俊介の声が揃った。次の瞬間俊介は固まり、俺は睨む。見えてないんじゃないかなかったのかよっ!

「……………ことは……………」

ユキは眉根を寄せ、言おうか言うまいか迷っているように顎に手を当てると、重々しく口を開いた。

「俊介くんは、さあくんの恋人とは違う?」

沈黙が、流れた。

「や、それはまた、別?」

ユキが焦ったように言う。

また、沈黙が流れる。

そして。

「はあっ?!」

俺達の絶叫が静かな公園に響き渡った。…………ハトが飛び立つ。

俺は会社を早退した。

もう頭の中も状況も……………わやだ。

その日の鍋は5人だった。

予てより予定の俺、ユキ、吉野に加え、飛び入り的大河。それから、今まで心配をかけた罰だ、と俊介はユキに引張って来られた。

普段は広すぎるくらいのリビングが今日は窮屈に感じるくらいだ。気温もきつと、2度は高い。

「心配したんだからねえっ!!」

思い出しグズリながら、ユキはもりもりと食っている。

「その豆腐俺のおっ!!」

「はい!!」

吉野が思わず伸ばした箸を引っ込める。大河のリクエスト通りのチゲ鍋だ。

「……おうちのユキくんって、こんなだったんだ……」

大河が耳打ちしてくる。

「いや、普段はここまでじゃ、ない」

俺がそっと囁くと、

「俊介くん! ついでっ!!」

鋭い声が飛び、ユキが俊介にコップを突き付けている。ついでと言っても飲めないユキだから、ウーロン茶だけれど。

「は、はい。すんませんお兄さん」

偉そうにウーロン茶をつがれているユキを盗み見て、俺はそっと溜息をついた。

俺は、俺の事だけに一生懸命で、誰かが俺の為に一生懸命になってるなんて、気づかなかった。

大層子供の頭だ、と俺はビールを飲む。俺の気づかなかった場所には、かなりショッキングな現実があった。

ユキは俊介の存在に気づいていた。

俺がその存在をユキには秘密にしている事。

時々、ユキに隠れるようにしてしゃべっている電話は、彼からのものである事。

朝早くとかに、よく部屋にいる事。

時々一緒に旅行したり、朝帰りしたりしてる事。

最近ケンカが増えた事。

それから、時々……彼を「天使」と呼んでいる事。

そこから導き出したユキの結論。

『弟に男の恋人がいる』

そりゃあギャグか? ってくらい短絡思考だが、その結論に到るまで、さすがにユキは何度も自分を止めたらしい。

何度も何度も、何かの勘違いで、何かきつと別の理由があるに違いないと、いくつも可能性を考えた。それで尚、納得の行く結論は『弟がホモだ』……だったらしい。

責める気にはなれない。俺だって多分逆の立場なら……うん。

「別に本人同士はいいと思う。でもきつと苦勞するでしょ？さあちゃん、それで幸せになれるのかな、って。好きな人と一緒にいるのは幸せだけど、その為にいっぱい苦勞するんなら、全体的なさあちゃんの人生って、それで幸せなのかな、って……」

殴ってでも別れさせようとか、どんな事があったても自分だけはさあちゃんの味方なんだ、とか、色々迷ったらしい。

けれど元々あまり長く悩んでいるのに向かないユキが次に取った行動は、

「俺本当の事言っているのかどうかわかんなくなっちゃってさ」

数少ない共通の友達である吉野に相談する事だった。

「俊ちゃんの事だっけのはすぐわかったんだけどね」

吉野はそう言っただけを聞いた。

「どっちがシヨックかなーって思っただけさ。弟にカレシがいるってーのと、弟が『死神』やってますっつーのと」

結局そのままあやふやに誤魔化した吉野を、俺は責められない。俺がもしも吉野の立場なら……だから、うん。

「でもねー、このままの状態がもう少し続いたら、俺しゃべる気でいたんだよ。全部。本当の事。だってユキちゃんも可哀相だし……アンタも相当煮詰まっただでしょ？お互いにさ、すっごく大事にし合っただもん。それを知っているのが関係無い俺だけなんて、もったいないじゃねーかよ」

関係無いなんて言っただけさ。そう、言おうとしたけれど、照れ臭くて言葉にはならなかった。

そして、吉野では埒があかないと気づいたユキが次に取った行動は。

「ごめんユキくん！俺ちょっと突発事故でさ、自分の事で

「精一杯で!!」

両手を合わせて誤る大河に、ユキはいいよいいと笑って見せた。

「というわけで、ごめん。俺ユキくんのスパイだったんです」

取り合えず俺はゲンコを落としてみた。

卒業証明を取りにきた大河と久しぶりにあったユキは、大河のバイト先が例の弁当屋だと知る。大河がウチの会社に入りするようになったのは、偶然ではなかったのだ。

「道が混んでて回り切れないとか適当な事言っただけ、配達区域変えてもらったの。結構がんばったんだから」

えへん、なんて得意気に言われても。

「ごめんねえ」

ユキがしおらしく謝る。

「いいよ!結局全然役に立たなかったし!!」  
「でも、今日現場を押さえられたのはさ、大河が連絡してくれたからだし」

「ああっ?!」  
俺は口に入れる寸前だった白菜を取り落とした。

「お前……あの時……」  
俊介から掛かって来た電話を、聞いて…?

呆然とする俺に、大河はにやあつと照れ臭そうな顔で笑った。

「ちよつとこつ…耳ダンボ?」  
「可愛くねえんだよっ!!」

両手を耳に見立てて、ぱたぱたっ、なんてやってみせる大河の頭を、俺は思いきり良くハタいた。こいつには同情の余地無しだ。それはいいけど。……いや、俺はこいつに同情する必要は全然無いと思うんだけど、俺から見てもそりゃあないだろ、と思うのは……。

ユキがハタかれた大河を見てあははと笑っている事だった。お前が原因なんじゃないのか?オイ。

タイミングが良すぎた筈だ。世の中、全くの偶然なんて、そうそう無い。

そしてすべての種明かしが終わった時、ユキの取った行動は。

「俊介くんが、単なる本物の天使で良かった」

真つ直ぐにユキは、俊介を見つめてそう言った。

「恋人を『天使』なんて呼ぶ寒いヤツが実の弟だったら、世間様に顔向け出来ないよ」

「問題はそこか」

ユキは屈託無くあははと笑う。

なんだよ『単なる本物の天使』って。

俺は泣きそうになった。

ユキは……ユキだ。俺の日常だ。

もしも口に出したら、何気にクールなユキはもう俺を弟と呼んではくれないかも知れないけれど『ユキの中に本当の俺がいる』そう思う。

「普通はもつと驚けよ！天使に失礼だろ！」

泣かないように、俺は笑う。ユキも笑う。

「別にいいよねー、俊介くんっ？」

リアクションが取れなかったらしく、ずーっと会話に参加していなかった俊介は、突然ぱたりと箸を置いた。そして俺が驚いている間に、素早く正座をし、姿勢を正す。

「恐縮です」

俊介は、深く、ユキに頭を下げた。

俺達は鍋を囲む。

熱さと辛さに汗をかきながら。

そして、宴の後。

みんなが帰った、熱気の冷めやらない部屋でユキは俺に言った。

「俺は、絵を書くでしょ？」

空けたビール瓶やペットボトルを集めるユキの背が、丸い。

俺は、両手を泡だらけにして食器を洗う。

「それは、俺の為だよ。さあちゃんの為じゃない」

「……うん」

プラスチックのレンゲは、油汚れが落ちにくい。俺は力を入れて擦る。

「だから、さあちゃんも『死神』は自分の為に、して」

何度かこすると、ようやく指にきゅっきゅっという感触が来る。まず一本。俺は丁寧にならずつレンゲを洗っていく。

「仕事だから、って、割り切らない方が、楽な事もあるよ」  
よっこいしょ、とユキはビール瓶を玄関に出しに行った。

しばらくして戻ってくる。

レンゲは、全部洗い終わっていた。

「もっと俺が若かったらさ」

今でもたった26歳だけど。」

「超能力少年気取りで、楽しくやれたのかも知らないけど」  
「ごつごつとした手触りの小鉢は俺のお気に入りだ。欠けた  
りしないように丁寧に洗って重ねて行く。」

ユキはペットボトルを両手に抱え、キッチンまでやって  
きた。新しいゴミ袋を出して「リサイクルごみ」にする。  
それを脇に寄せると、俺の隣に手を伸ばしてきた。

「……さあちゃん、台布巾これ使っていない？」

うん、とうなずいた俺と、ユキの目が一瞬合った。

俺は、何だかわからないままに呟いていた。

「俺、好きな事やってもいいのかな？」

1度だけ瞬きをしたユキが、次の瞬間にはふわりと笑う。

「いいよ」

「………そっか」

思わず笑ってしまう顔を見られたくなくて、俺はわざと乱  
暴に洗い桶に手を突っ込んだ。

がちゃん、と瀬戸物のぶつかる音がした。

がちゃんがちゃと、わざと子供みたいに音を立てたら、ユ  
キが「子供みたいだよ」と笑っていた。

『天使になる日』 犬頭8 著

sakka.org